

教職コンソーシアム通信

学びの架け橋



人にまっすぐ。
大阪教育大学

01 オープンキャンパス

02 リレーエッセイ

03 交流事業の紹介

04 加盟校出身学生・卒業生の紹介

05 加盟校の取り組み紹介

06 大学トピックス／編集後記

大阪教育大学オープンキャンパスに 6600人が来場

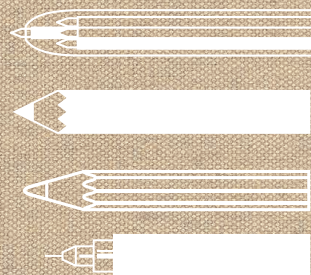
大阪教育大学オープンキャンパスを7月30日、31日の2日間にわたり柏原キャンパスで開催し、昨年度より1000人以上多い6628人の受験生・高校生、保護者が参加しました。模擬授業や各専攻・コースの説明会はほとんどが満席となり、大学生活やサークルなどについて学生と話せるフリートークコーナーも好評でした。屋外ではダンスや音楽のサークルが個性豊かなパフォーマンスを披露しました。





RELAY ESSAY

リレーエッセイ

めざせ、なにわの
グローバルティーチャー！大阪教育大学連合教職大学院
田中 満公子

私が3年間の高校生活を送ったのは、三重県松阪市にある県立松阪高等学校でした。松阪は梶井基次郎の小説「城のある町にて」の舞台となりましたが、国学者の本居宣長や松阪商人を輩出した地でもあります。母校は2010年に創立100周年を迎え、2年後の夏には野球部が甲子園出場を果たしました。実は母も姉も同校の卒業生です。母娘3人が教えを受けた先生が一人おられます。国語科の出丸先生です。最初の授業のとき「あんたが多美ちゃんの娘か？」と聞かれたこと、授業からみずみずしい感性を感じたことを今でも記憶しています。他にも数学の奥山先生(優秀すぎて数学がわからない生徒のことが理解できない様子でしたが、それでも寄り添って指導してくださいました)、日本史の森本先生(数少ない若手教員の中で人気No.1の親しみやすい先生でした。特に男子から支持が厚く生き方モデルになっていたかも知れません)、古典の石倉先生(底抜けに明るい軽快な語り口の先生でした。ある日地震で教室がグラッと揺れると「10円玉入れたらよう揺れたなあ」といって笑われたときには場の転換力の高さに感銘しました)や英語の河村先生(風貌が英国ジェントルマン風でした。「遅いことはキャットでもする」といって叱られましたが、このフレーズは後に教員になってからは使わせていただきました)など、思い出に残る先生は枚挙に暇がありません。自分のスタンスや教養と哲学をもっている先生方が多く、そのような先生方に見守られながら大らかに伸び伸びと3年間を過ごし、人として教師としての土台をつくっていった時期でした。

好きな教科は中学時代から地理と英語でした。中学時代地理の鳥羽先生と、考査で満点を取りたい、取らせないで師弟対決をしていました。高校生になってからも地図帳を開き、この国にはどんな人が住んでいて、どんな言葉を使い、どんな仕事をしているのかと想いをめぐらすのが愉しみでした。英語については、現在の4領域のバランスに配慮した授

業というよりは読解・文法中心の授業でしたから、考査になると開始15分程で解答を終了していました。が、理数系の教科は大いに苦戦をしていました。そんな高校生は3年生になる頃には海外を自分の目で見たくなり、卒業後まずは三重を離れてメトロポリス東京に進出する戦略をたてました。もちろん教師志望だったのですが、加えて「東京に行けば英語で話ができる」「東京で4年間暮らせば、卒業後世界のどこで暮らすことになってもやっていける」と考えていたのです。

戦略は成功し、東京の大学の教育学部英語英文学科に進みました。現代のように世界がフラット化し、情報や人、モノ、お金が短時間で境界を越えていく時代ではなく、1970年代前半はテレビやラジオで英語が流れることすら稀有だったのです。TEDもYouTubeもMOOCSもない時代です。1ドルが300円の時代で海外留学は至難の業でした。恵まれた環境ではありませんでしたが、その分知恵を絞り努力を重ねていたように思います。大学時代は下宿生活の困難さに鍛えられたり、東京大学工学部助手宇井純氏が開催する公開自主講座「公害言論」にスタッフとしてかかわるなど、自立し社会性を身に付けていった時期でありました。

その後、英語の教師として管理職として大阪府立学校に長年勤め、現在は連合教職大学院で院生の指導にあたっています。この間、地理と英語と海外が大好きな高校生は、皆さんに導かれバージョンアップを繰り返し、今では「グローバル人材を育成する教員の育成プログラムの開発」に取り組んでいます。高校生のみなさん、ぜひ、大阪教育大学で、卒業後は連合教職大学院で共に学びませんか？なにわのグローバルティーチャーをめざして！



田中 満公子 たなか まきこ

大阪教育大学
連合教職大学院准教授
元府立守口東高校校長
元府立枚方高校校長
前府立三国丘高校校長



交流事業の紹介

EXCHANGE PROGRAMMES

高校生育成プログラム「教師にまっすぐ」を実施

教師になりたいという夢や志を持つ高校生を対象とした育成プログラム「教師にまっすぐ」を、7月から8月にかけて計3日間開催し、高校生58人が受講しました。

初日は、じゃんけんで勝った人が卵から人に進化していく「進化じゃんけん」や、メンバーの共通点を探し、班ごとに数を競う「共通点探し」などのゲームを行い、緊張をほぐしました。その後本学学生から大学生活や教師になるための勉強について、大阪府の教員採用試験担当者から試験の実際について、それぞれ講義を受けました。グループ毎に学生や教員スタッフがサポートしながら「理想の先生像」について話し合い、最後は全員が夢に向けた思いを1分間でスピーチしました。

2日目は、7月30日・31日に開催されたオープンキャンパスに参加しました。説明会や模擬授業を受けたり、施設を見学したりした後、集合してグループ毎に「大阪教育大学に来て初めて知ったこと、びっくりしたこと」を話し合い、発表しました。

最終日は、一日かけて研究と発表を行いました。

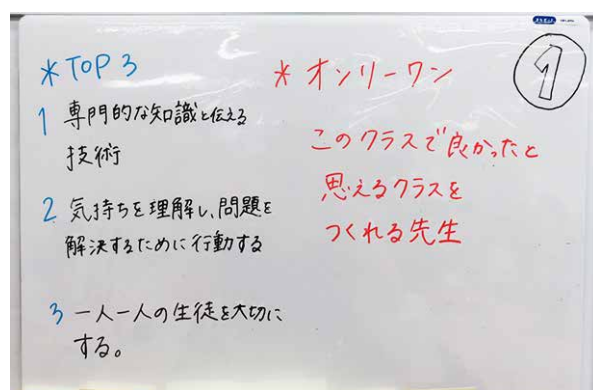
大学教員、高校教員、大学院生らも加わり、「酵素を調べてみよう」「日本一の英語授業」など6つのテーマに分かれ、専門教員の授業を受けた後、グループ討論しました。「社会を見る目を養う」をテーマに発表したグループは、「イギリスのEU離脱」について、離脱派と残留派それぞれの主張をわかりやすく解説しました。

参加した高校生らは、「初めて会った人と議論ができるか不安だったが、先生になりたいという共通点について話しているうちに意見がたくさん出てきた」「他校の同じ志を持つ人の意見はすごく勉強になった」などと感想を語りました。

今回のプログラムを企画した恩知忠司教授(本学教職教育研究センター)は、「3日間皆さんと一緒に勉強できて、私自身とても楽しかったです。目を輝かせて課題に取り組む姿がとても凛々しくて、『いい先生になってくれるだろうなあ』と心から思いました。自分の可能性を信じて、これからも大きな目標に向けて頑張ってください。ではまた、大教大で会いましょう」と話しました。



受講生とスタッフたち



「理想の教師像」を話し合ったまとめ



オープンキャンパスの感想を話し合う



グループ発表

加盟校出身学生・卒業生の紹介



こぎた やすのり
小北 恭徳 さん

学校教育教員養成課程社会科教育専攻1回生
岸和田高等学校2013年度卒

—大教大を選んだ理由は？

高校1年の時、教師になりたいと先生に相談したら、大教大を勧められました。オープンキャンパスにも来て、ここに入りたいたと感じました。

—教師をめざすきっかけは？

高校の担任の先生です。3年間ずっと同じ先生が担任だったのですが、どんなことでも相談

に乗ってくれて、たくさんアドバイスをもらいました。とても優しく、こんな教師になりたいと思いました。

—高校生活で一番印象に残っていることは？

部活動です。中学高校とずっと陸上部でした。OBと現役生との交流も多く、今でも母校の陸上部の練習や試合に顔を出しています。天王寺高校、北野高校、岸和田高校の3校で、定期的に陸上部OBや現役生が集まって交流試合を行っていて、それにも参加して

います。陸上部のOBが教員になって、陸上部顧問として戻ってきた例もあるので、自分もそうなれたら最高だなと思います。

—授業以外で取り組んでいることは？

アルバイトで塾講師をやっていて、中学生に社会を教えています。初めて生徒の前に立った時はとても緊張して、声は震え、板書は間違えて大変でした。今は進路相談を受けたり、勉強以外の話をしたりと、信頼関係ができてきたのかなと思います。生徒によって理解度にバラつきがあるので、できる生徒を飽きさせないようにしつつ、授業についてくるのがしんどい生徒を置いていかないようにするのが今の課題ですが、本当に難しいです。

—後輩にメッセージをお願いします。

大学を選ぶときには、自分のやりたい勉強ができるというのは大前提ですが、それだけじゃなく、オープンキャンパスや大学祭などに参加して、その大学の雰囲気が自分に合っているかということを絶対に確認した方がいいと思います。

よしおか

吉岡 あやの さん

学校教育教員養成課程理科教育専攻3回生
生野高等学校2012年度卒



—大教大を選んだ理由は？

高校の時は、実は教員志望ではなく、別の大学をめざしていました。しかしそれが難しくなり、どうしようか迷っている時に、中学の卒業文集を見たら「教師になりたい」と書いていて、そんなことを考えていたなと思い出しました。そこで教育系の大学を探していた中で、大教大のオープンキャンパスに参加して、雰囲気の良さや先生の優しい感じに惹かれました。

—大教大を選んでよかったところは？

教育に特化した授業を多く受けられ、無駄がないです。また、例えば生徒指導についての授業にも何種類かあって、複数の先生の意見を聞けるので、視野を広げ、自分の考えを見つけることができます。

—学生生活の中で印象に残っていることは？

科学系研究室では毎年夏休みに、小・中学生を対象に「楽しいかがく教室」という理科実験教室を開催していて、ゼミに所属している学生は全員先生役をやります。わたしは結晶を作る実験を担当し、予備実験を何回もしたりして準備しました。初めて深いテーマを突き詰めたので印象深いです。

—将来の夢は？

入学した時はぼんやりと先生になればいいと思っていましたが、授業や実習で色々なことを学んで、今は高校の教員になりたいです。子どもと接して教えることはもちろん好きですが、自分の研究をする時間も欲しいので、全ての教科を教える小学校教員では授業に追われてしまうかなと、教育実習に行って感じました。

—後輩にメッセージをお願いします。

高校時代は、自分もそうでしたが漠然とした夢がなく、それを不安に感じている人も多いと思います。でも、大学での様々な経験を通して目標が決まってくこともあるので、不安に思わないで、自分にできることを少しずつでも学んでいってほしいです。そのためにも、新しい経験のできるチャンスは逃さないよう、色々なことに挑戦してください。



加盟校の取り組み紹介

MEMBER HIGH SCHOOLS' PROGRAMMES

大阪府立高津高等学校

本校は、大正7年(1918年)、大阪府立第11中学校として創立以来、多くの有為な人材を輩出し続けている、歴史と伝統のある学校です。



「自由と創造」「日進日新」を校風・校是とし、「強靱な知性」「みずみずしい感性」「品格ある人間性」の育成を教育目標としています。卒業生のほとんどが、いつまでも誇りを持ち、大切にしているこの校風・校是の進化・深化をめざして日々の教育活動を続けており、国からSSH(スーパーサイエンスハイスクール)、大阪府からGLHS(グローバルリーダーズハイスクール)の指定をいただき、未来の科学者・技術者をはじめ、様々な分野で地球社会の次代を担うリーダー育成に向けて、多様で調和のとれた教育活動に取り組んでいます。



創立100周年／KOZU Creative Lab！……………

本校は、平成30年に創立100周年を迎えます。同窓会、PTA、PTAのOB会である高風クラブ、学校の4団体からなる準備委員会が立ち上がり、「オール高津」で100周年を成功させようという機運が徐々に高まっています。

本稿では、この創立100周年記念事業のトピックとして「KOZU Creative Lab！」(食堂をリニューアルし、ラーニング・コモンズづくりにチャレンジする企画)について、紙幅の許す範囲で紹介させていただきます。

学校とは、何か？……………

「ビッグデータ」、「AI」、「IoT」と並べるまでもなく、科学技術の進歩には目覚ましいものがありま

す。インターネットを使えば、ほとんどの知識・情報は集めることができます。どこにいても高度な授業も受けることができ、例えば、現在の大学入試を突破するという意味では大きな不自由はなくなりつつあります。そんな中で、「学校とは、何か？」

一つの答えが「人と共に学ぶ場、すなわち他者との関わり、交わりの中で自己を成長させていく場」だと考えています。

ラーニング・コモンズ(KOZU Creative Lab！)……………

学習指導要領を巡る議論を引くまでもなく、これまでの「個性を生かす教育」、「自ら学ぶ力」に加えて、「思考力・判断力・表現力等の育成」及び「学習意欲の向上」が求められ、自からの発言や活動が認められる喜びにより学習意欲を高め、自分と異なる考えや発想に触れることで自己中心的な考えから脱却すること。そして、力を合わせて新しい価値を創造し、課題を解決できる能力を育てていくことが求められています。

課題研究活動やアクティブ・ラーニングに注目が集まり、電子情報も印刷物も含めた様々な情報資源から得られる情報を用いて議論を進めていく学習スタイルを可能にする「場」の代表例として「ラーニング・コモンズ」への期待が高まっていることは、ご存知のとおりです。

高津高校らしい新規性のあるラーニング・コモンズ機能を備えた「KOZU Creative Lab！」を創ることで、生徒たちが自然に「集まる場」となり、一体感や帰属感を高め、共に学び、活動する喜びや誇りを育む。そして、生徒たちは、自らの柔軟性をさらに高め、闊達に意見を交わし、そこから将来のわが国・世界をリードできる人材となって巣立っていく。

「KOZU Creative Lab！」を舞台に、そんな本校の“101年以降”を、少しずつ現実のものとしていくことができれば幸いです。



大学トピックス

TOPICS

支援学校の児童・生徒を招待し 「ハートフルコンサート」を開催

「障がいのある方やその介護者の方に、生の音楽に触れていただきたい」

本学は、大阪府教育委員会とザ・シンフォニーホールとの共催で、支援学校の児童・生徒や介護者を招待し「ハートフルコンサート」を開催しました。

ザ・シンフォニーホールが会場を無償提供し、主旨に賛同した全国の教育系大学などの管楽器専任教員20人がゲスト出演しました。府教委の協力で、大阪府内の特別支援学校4校の児童・生徒・職員ら約350人が招待されました。

大阪教育大学ウインドオーケストラが、ダイナミックで色彩豊かな演奏を披露。クラシックの名曲からダンスつきのAKBメドレーまで、多彩なプログラムを展開しました。

特別ゲストとして、作曲家の八木澤教司さんが、自身が作曲した東日本大震災復興支援曲「明日という日が」を指揮しました。また、坂本九さんの名曲「上を向いて歩こう」では、本学大学院修了生で視覚障がいのある濱田直哉さんが独唱を務めました。



「こうして教える小学校英語」 ワークショップを開催

2020年度から小学高学年で英語が正式教科となることを踏まえ、ワークショップ「こうして教える小学校英語」を天王寺キャンパスで開催し、小学校・中学校の教員ら約150人が参加しました。

小学校外国語活動の普及・啓発に取り組んでいる文部科学省国立教育政策研究所の直山木綿子調査官が講演し、「現在の外国語活動はコミュニケーション能力の素地を養うことを目標としているが、2020年度からは『聞くこと』と『話すこと』の2技能の基礎を養うことになる」と、学習指導要領の改訂内容を説明しました。そのうえで、「児童が気持ちを伝えあうコミュニケーション活動を工夫してほしい。外部人材に丸投げせず、苦手な先生を支援するなど、チーム学校で取り組んでください」と呼びかけました。

このほか、音と文字の関係、リズムで覚える会話表現、文字の書き方指導、デジタル教材活用など、実践的な指導方法について、本学教員および附属学校教員が発表しました。



編集後記

4月から広報室に新加入しました。当初は、不慣れなことばかりに戸惑いましたが、広報室の皆様の温かいお心遣いをいただき、感謝しております。

さて、今年の夏のオープンキャンパスでは、昨年度より1000人以上多い6628人の受験生・高校生・保護者の方々が参加してくださいました。「先輩からの声」で登場したお二人の共通点で、大教大を選んだ理由に「オープンキャンパスに参加したこと」がきっかけとなっていることが、大変嬉しい限りです。次回も、本学の魅力をお伝えするたくさんの企画をご用意しておりますので、皆様のご来場を心よりお待ちしております。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。(K)